

国交樹立期における日本のフィンランド理解と表象について

小林 将 輝

1. はじめに

この 20 年ほどの間に、日本におけるフィンランドの認知度は非常に高まっている。きっかけは 2000 年に OECD が行った国際学習到達度調査（PISA）において、フィンランドが「読解力」で 1 位を取り¹⁾、その後 2003 年の調査でも高い評価を得たことである。これにより、フィンランドの教育が注目され、フィンランド教育を紹介する多く教育関連の書籍が出版された。2006 年に上映され、ヘルシンキで日本食のレストランを営む主人公を描いた『かもめ食堂』は²⁾、このフィンランドブームの後押しをしたと言えるだろう。また、2012 年からおよそ 1 年の間に 5 都市で開催された「フィンランドのくらしとデザイン」展は、地方都市で開催されたにも関わらず人気を集め、終了時には総来場者 10 万人を突破した³⁾。2016 年に行われた、主としてフィンランド関係機関の主導で行われた調査では、日本人にとってフィンランドは、スウェーデンやデンマークよりも「ポジティブなイメージ」を持つ国であることが示されたという⁴⁾。

こうしたフィンランドに対する良い印象が生じた背景の一つには、フィンランド政府による SNS を利用した積極的な情報発信がある。駐日フィンランド大使館が 2011 年に開設した Twitter アカウントには、2018 年 10 月時点で約 143,000 人のフォロワーがいる⁵⁾。これは、同じ北欧国家のスウェーデン大使館（約 41,000 人）、デンマーク（約 47,500 人）、ノルウェー（約 9,000 人）より数倍多く、他のヨーロッパ諸国であるドイツ（約 89,000 人）やイギリス（約 71,000 人）と比べてもかなり多い。フィンランドの人口が約 550 万人にすぎないことを考えると、このフォロワー数は驚異的な数字と言ってもよい。

フィンランドの「イメージ」ということを考えてみると、フィンランドやフィンランド人に対するお決

まりの表象、すなわちステレオタイプな言説が歴史的に根強く存在していることがわかる。例えばサンタクローズ、ムーミンといった固有のキャラクターに依拠したイメージ、森と湖、白夜といった北欧地域独特の自然や自然現象、マリメッコやイッタラと言った企業ブランドに依拠したイメージ、近年では洗練された北欧デザイン、IT 企業、そして先に述べた教育先進国というイメージなどが代表的である。そしてフィンランド人という民族の国民性については、例えば「シャイ」「不屈の精神」といった国民性として認知される傾向がある⁶⁾。

しかし、こうしたフィンランドの一般的な「イメージ」は、どのように生じ、再生産されてきたのであろうか。例えば、日本人はフィンランドに対して、初めはどのような印象を受けたのだろうか。国家間の交流が始まってから、フィンランドを訪れた日本人は、この国や民族をどう見たのだろうか。当初は上記のようなステレオタイプはあったのだろうか、また、そうしたステレオタイプと対峙した場合、どのようにそれをとらえ、表現したのだろうか。このような疑問には、そもそもこうしたステレオタイプの国や民族のイメージが歴史的にどのように形成されるものかという広い領域に関わる、複雑な問いが含まれているだろう。そのため単純に明らかにされるものではないが、ある国のイメージは、特定の時代や社会背景によって影響を受け、また、受け取り側の様々な文脈に依拠するものであることは間違いない。

本論では、フィンランドと日本の最初の接触の時期を、最初期、国交樹立以前と直後の 3 つに分けて、それぞれの時期における、日本人のフィンランドの「イメージ」について明らかにすることを主眼としている。そのさい、フィンランドに関する出来事や、旅行記や報告や記録といった文献を時系列に沿って取り

上げながら、フィンランドやフィンランド人が、日本において当初はどのように理解され、表象されてきたのかということに注目する。本論においては様々なジャンルの文献を網羅的に取り上げることや、また文献資料以外の他の媒体の調査は不可能であるが、両国の接触の始まりに見られる比較的目立った、また代表的と思われる人物や出来事の関連文献、資料の幾つかをサンプル的に取り上げる。そしてそれによって、言説のレベルにおいて、日本におけるフィンランドをめぐる「イメージ」という問題について、一定の認識を獲得することを目指している。

2. 国交樹立期のフィンランド理解と表象について

(1) 最初期の接触

①フィンランド側の接近と日本人の滞在者

フィンランドは、中世の13世紀頃、およそ600年間スウェーデン王国に組み込まれた。この所謂スウェーデン統治時代を経て、フィンランドは1809年より、フィンランド大公国としてロシア帝国の統治下におかれた。そして約100年間のロシア統治時代の後、1917年にロシア革命に乗じて独立を果たす。日本がフィンランドと外交関係を樹立したのは、その2年後の1919年である⁷⁾。従って、フィンランドは独立国家となって、まだ100年ほどの歴史しかないが、双方が最初に言及した記録には、どのようなものがあるのだろうか。

フィンランド側から見た場合、フィンランドの芸術家たちは、1880年代のパリにおいて、ジャポニズムを通じて、日本に間接的に接近をしていたという事実がある⁸⁾。また、1900年に起きた北清事変、いわゆる義和団の乱の頃から、日本とロシアの関係が悪化するにつれ、同じくロシアとの対外関係に苦慮していたフィンランドは、日本に関心を向けるようになったとの証言がある⁹⁾。

日本側から見た場合、この国交樹立以前、すなわちフィンランドが大公国としてロシアの統治下にあった時代において、日本とフィンランドとの最初の接触は、いつ、どのように行われたのかははっきりとしない。後述する渡邊忠雄は、おそらくフィンランドに長期滞在した最初期の一人であったが、1907年

から1911年の4年間の留学中に、渡邊のところ立ち寄った日本人は2名にすぎなかったと証言している¹⁰⁾。また、フィンランドの最初の代理公使となったグスタフ・ヨン・ラムステットは、日本に到着した1920年に、当時フィンランドにいた日本人は一人もいないと発言しているが¹¹⁾、渡邊のような留学生などもいた可能性があるため、これはさすがに誤りだろうと思われる。とはいえ、これらの証言から、国交樹立前後の時期において、フィンランドを訪問した、あるいはフィンランドに長期滞在した日本人はごく僅かであったという事実がわかる。そしてさらに言えば、それ以前の時代においては、非常に限られた接触しか存在しなかったということが推測できる。

②大黒屋光太夫、岩倉視察団による間接的な接触

江戸期の1783年(天明3)に、大黒屋光太夫(1751-1828)がアリューシャン列島沿岸で遭難した時に、彼を帰国させるために尽力したエリク・ラクスマン(Erik Laksman, 1737-1796)、日本へ送還するためのグループを率いたその息子アダム・ラクスマン(Adam Laksman, 1766-1806?)がフィンランド人であった¹²⁾。すると象徴的な意味における日本とフィンランドの最初の「出会い」は、18世紀後半になってからだと言える。海外に渡った日本人には、幕末に諸藩が海外に送った留学生、そして維新後に政府が海外に送った留学生などがある。例えば、1868年(明治1)から1872年(明治5)までの5年間でアメリカ留学をした者は500人にも達したと言われている¹³⁾。しかし、近代化を目指す日本にあって、当初留学先に選択されたのは専らアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、オランダなどであった。この時期にフィンランドに直接留学したものはもとより存在せず、宗主国であったロシアには、幕府と諸藩の留学生を含めて9名の留学生しかいなかった¹⁴⁾。ロシアに対する関心がこの程度であったので、フィンランドに対してはいつそう関心が向けられることは無かったであろうことが推測できる。

それでは、そもそもフィンランドという国の存在が知られるようになったのは、いつの時期であった

のか。これは本論が扱える範囲を超えているが、江戸時代後期から明治期にかけ、日本側が西欧の情報を得ようと努めるなかで、また、ロシアを含む西欧へ向かった留学生、渡航者が増えた結果、世界情勢、次いでロシアの情勢も明らかになり、その結果、その統治下にあったフィンランド大公国という国についても、次第に情報が得られるようになっていったのではないだろうか。

1871年(明治4)から2年余りかけて行われた、岩倉具視の使節団による西欧諸国の視察旅行の報告書『米歐回覧実記』においては、フィンランドについて言及されているのを見ることができる。しかしそれは視察団がフィンランドを訪問したということではなく、ロシア帝国についての報告の中で、ロシアが統治する国の一つとしてフィンランドが登場しているからである。とはいえ、本書においては意外にも多く、フィンランドの名前が挙がっているのもまた事実である。

例えば本書でフィンランドについて言及されている内容をまとめると、以下のようになる。フィンランドは1808年から1809年に起きたロシア・スウェーデン戦争によって、ロシアの統治下に入った国であり、面積は約14万5千平方マイル、地勢には高地が有り、人口は1,830,853人、住人はロシア人が信じるギリシア正教では無く、皆プロテスタント(ルーテル派)であって、人種や流通している貨幣もロシアとは異なる。また、ロシアはフィンランドとポーランドを半ば独立国として扱い、その地域の古いしきたりを尊重しているものの、他方、両国においてはロシアの専制政治に対して不満を持つものが絶えないこと、さらに、鉱業(銅、鉄)や工業生産が盛んで、それはロシアの首都サンクトペテルブルクに恩恵をもたらしていることや、また、漁業も利益を上げている等、記述があるのを確認できる¹⁵⁾。岩倉使節団の報告は、直接訪問した体験に基づいたものではないものの、このような間接的な報告によって、「ロシア帝国の統治下にあるフィンランド国」として、フィンランドは日本の一部の層に認知されるようになっていったと考えられる。

③中村直吉が描く悲劇的な国としてのフィンランド

それでは、日本人がフィンランドの地に実際に足を運び、それを記録したものは、いかなるものがあるのだろうか。幕末、明治初期の留学生の滞在中の合間に行われた旅行や、ジャーナリズムや商用、あるいは観光等で、日本人の誰が初めてフィンランドの地を踏んだのだろうか。これも特定するのは易しくないが、旅行者としてフィンランドを訪れ、かつ、その滞在の記録を残した最初期の人たちのうち、一人は中村直吉(1865-1932)という人物であったということと言えるだろう。

中村が海外に出た最初の経験はアメリカでの滞在であった。当初は福沢諭吉が発案したアメリカに日本村を建設する計画に参加する予定だったが、この計画は頓挫してしまう。そのため中村は単身渡米をし、単純労働のようなことをしながら1888年から1898年まで約10年間アメリカに滞在了。そしてその帰国した3年後には、旅行熱が再びぶり返し、1901年から1907年まで約6年間、「無銭で」世界一周旅行を行った¹⁶⁾。そして、その旅行の記録は、押川春浪との共著で1908年(明治41)から1912年(明治45)にかけて『五大洲探検記』という5巻本で出版される。

この旅行記の第5巻『歐洲無銭旅行』の中で¹⁷⁾、中村がフィンランドに滞在了エピソードが出てくる。中村は世界の国々を巡る中で¹⁸⁾、ロシアの首都サンクトペテルブルクを汽船で発ち、1903年(明治36)9月30日にフィンランドのヘルシンキに到着する。翌日10月1日には再度汽船に乗船し、スウェーデンのストックホルムに向かったので、中村のヘルシンキの滞在期間は実質1泊2日にすぎないものであった¹⁹⁾。しかし、これは旅行者としての日本人がフィンランドについて語った記録の貴重な最初の一つであると言えるだろう。

その中村の滞在の様子を簡潔にここにまとめると、おおそ以下の通りである。中村はサンクトペテルブルクで汽船会社の支配人と交渉し、運賃を払わずヘルシンキまで汽船でやって来る。到着したその足で地元のホテルの支配人のところに行き、再び交渉をすると、中村が日本人であったため、やはり無

料で部屋が提供される。すぐに市内観光をしようと街に出ると、一人の紳士に話しかけられ、誘われるままにその奥方とその友人、4人で博物館見学をする。博物館見学後は、喫茶店で談笑し、再び紳士に誘われるままに、紳士の自宅へ行く。辻馬車に乗ってその家に行く道すがら市内見学をし、紳士の家に着くと、4人で会食をし、最後には記念撮影をする。中村はその時、フィンランドがロシアによって、「母國」スウェーデンから引き離されたために²⁰⁾、同じくロシアと関係が悪化している日本に対して同情的であると観察する。そして、弱小国が大国に敵対心を持つことに同情をする。翌日になってホテルを発つとき、支配人から次の滞在地ストックホルムのホテルの紹介状をもらう。中村は汽船に乗りこむと、港で船を見送るフィンランド人たちが、スウェーデンに向かう乗客たちに対して見せる、ある種の憂鬱な様子を感じ取る。中村はそれを「悲劇」と呼び²¹⁾、見送りの人たちが歌う歌の中に、憧れの「母國」であるスウェーデンに向かう人たちの幸福を羨んでいる、弱小国の民の悲痛が響いていると解釈をする。港を離れると船はバルチック海を走り、ストックホルムに到着する。

中村のフィンランド滞在の記録は非常に特徴的である。というのは、この滞在記からは、ヘルシンキという町の様子がほとんど読み取ることができないからである。短い時間であったが、それでも訪問した「博物館」の名称も、その見学したはずの展示も語られることが無く、辻馬車から見たというヘルシンキの町の風景も一言も語られることは無い²²⁾。中村の語りにも力点が置かれているのは、第一に、代金を支払わずに船での移動や宿泊ができたこと、また、住人に親切に対応されたことである。そして第二には、フィンランド人が強国ロシアとの関係に苦勞していることであり、そしてそれゆえ、同じような境遇にある日本に対して好意的であり、実際に、中村も親切に遇されたという体験である。つまり、ヘルシンキの町の姿や、具体的な事物といった情報は、本書にはほとんど登場せず、その代り、住人との個人的な交流と、そこから想像を広げた弱小国の憐憫といった独特の抒情的な調子が本書には存在している。そして、この

調子はヘルシンキを出る汽船の場面で頂点に達している。宗主国から引き離されたフィンランド人の「悲劇」がおよそ3頁に渡って書かれることになるのである²³⁾。

これらのことから中村が提示するフィンランド像は、かつての宗主国から引き離された悲劇の国としてのフィンランドであると言えるだろう。本書は世界旅行を記した旅行記であり、それゆえフィンランドに触れているのはごく一部にすぎない。従って、中村が提示したこのフィンランド像が、日本社会に与えた影響は非常に限定的であると言える。しかしながら、ロシアという強国に苦しむフィンランド²⁴⁾、もしくは大国の間で翻弄されるフィンランドという見方は、この後見るように、日本人がシリアクスとの交流を見る見方にも通じ、また、渡邊が書いた記事にも時おり見られる見方である。そして、現代に至るまで日本人が持つことになったフィンランド像の一つであると言えるだろう。

(2) 国交樹立以前：日露戦争前後

① コンニ・シリアクスと明石元二郎の協力関係がもたらす弱小国の物語

これまで見た出来事、記録は、いずれもフィンランドの限定的な情報を日本にもたらしたものにすぎないものである。これらの後の時期で、かつ1919年の国交樹立以前において、日本側がフィンランドという国について比較的意識するようになったのは、海外でのフィンランド人との政治的接触と、日本でのフィンランド人宣教師の伝道活動などによると考えられる。これら20世紀初めに起きた出来事には、やはり限定的ではあるものの、フィンランド人との直接の交流を通じて得られた経験を見ることが出来る。従って、日本のフィンランドに対する認知度の高まりは、特定の社会層や地域に限定された範囲であるとはいえ、この時期に端緒を持っていると言っていいたいだろう。

19世紀後半に行われたロシアによるフィンランドの自治に対する制限措置は、フィンランド国内のナショナリズムを高揚させたが、それは後に、ロシアと戦争をすることになる日本においても大きな意味

を持つことになる。こうしたロシアの圧政に対して積極的に抵抗をしようとしたフィンランドの一派はアクティヴィスティと呼ばれ、このアクティヴィスティの指導的立場にある一人、コンニ・シリアクス(Konrad (Konni) Zilliacus, 1855 - 1914) は、在ストックホルム日本公使館付き武官として派遣されていた明石元二郎(1864 - 1919)と1904年に接触し、以後、対ロシア諜報、扇動工作で協同した。

このシリアクスは、それに先立つ1894年から2年間、アメリカ人妻と共に来日して、その滞在の成果として『日本研究と素描』と題された、日本の文化、風物を図版と共に紹介した一種の案内書も残した日本通でもあった²⁵⁾。フィンランド初代公使ラムステットが1920年に日本に着任したとき、日本の政府関係者の一部はシリアクスの名前を挙げて、親しみを持って話しかけてきたというエピソードがある。シリアクスは日本では「尊敬」されており、それゆえラムステットは、赴任当初はシリアクスを通じて他の外交官よりも優位な位置に立つことができたという²⁶⁾。日本とフィンランドの最初の歴史的な接触として、こうした政治的な接触が存在しているのである。

明石がヨーロッパにおいて行ったロシアに対する諜報、扇動活動、通称「明石工作」は、日本の近代史上類をみない予算規模で実行され、ロシアに対する革命勢力諸団体を援助したものであった。それが日露戦争での日本の勝利をもたらした大きな要因の一つであったという見方が、軍部内では遅くとも1920年代頃には成立していたようである²⁷⁾。明石が日露戦争終結後に陸軍に提出した『落花流水』という報告書は——表向きには極秘で扱われた資料だったが——陸軍内では参謀の教育用に利用され、また写しも作成されていた²⁸⁾。

フィンランドとの関係で言えば、これらの資料と接触することができた軍部や政府関係者の一部の者たちは、そこからシリアクスと明石の国を超えて協力する関係性を見出した可能性がある。即ち、ロシア諜報部の監視下の中、ストックホルムで対ロシア工作を進める明石が、反ロシア政府抵抗運動の指導的立場の一人として、国内外の反ロシア政府組織と

接触していたシリアクスと出会う。そして二人は互いの利害が一致したために、相手を利用しながら、自己の目的を達しようとする、そのような関係性である。これは、経歴も立場も異なる二人が、大国ロシアに対して一致協力し、奸計を巡らすという、スパイ映画さながらの「物語」と言えよう。そしてこの物語は、列強国であるロシアを戦争で打ち破ったという日本の戦勝物語の、いわばサイドストーリーとして受け止められたのではないだろうか。明石は1919年10月に死去したが、ラムステットが来日したのは、その年が明けた1920年2月であった。そのような時期にやってきたラムステットに対し、日本側が数奇な縁を感じ、それが、ラムステットが体験したような、親しみを込めた日本側の対応につながったのは不思議ではない。

この明石工作については、現在では見直しが進み、その成功神話については再検証されている。稲葉千晴によると、『落花流水』には、明石の誇張や事実の隠蔽、そして誤記も含まれているという。伊藤は、それゆえ『落花流水』をもとにして書かれた伝記には史実との乖離が存在しており、それゆえ、それらをもとに書かれた歴史小説には、さらに史実から離れたものとなっていると指摘をしている²⁹⁾。そうであるならば、後になって成立した明石工作をめぐる言説には、慎重になる必要があると言えるだろう。また、フィンランド側であるシリアクスの残した記録から見ると、明石がシリアクスらと協力を通じて望んでいたのは、フィンランドの独立ではなく、日露戦争を有利に運びうるロシアへの妨害であったとされる³⁰⁾。その点から見ても、この出来事に過度に情緒的な意味づけを与えることに対しては気をつけなくてはならない。

とはいえ、本論が関心を向けている、フィンランドに対する日本の初期の印象という観点から見ると、この二人の物語は、日本においてフィンランドに対する親近感や共感を生み出すにあたって十分な役割を果たしたことが推測される。従って、当時の軍関係者や政府関係者など、『落花流水』をはじめ、明石工作の関連資料や、それにまつわる言説に接触してきた一部の社会層の中に留まるとはいえ、これが日

本の最初期のフィンランド像の一つを形成したということが言えるのではないだろうか。

②渡邊忠雄による最初期の包括的なフィンランド紹介の試み

国交樹立前に存在した日本とフィンランドの接触の一つとして、ルーテル派の伝道活動による交流も挙げておきたい。

1873年に創立されたフィンランド・ルーテル福音教会は、海外での布教活動の一端として、日本での伝道活動を行った。この教会から派遣されたウェルルース牧師家族、そして当時、若干16歳の女性であったエステル・クルヴィネン (Esteri Kurvinen, 1883 - 1952) が来日し、長崎で伝道活動を始めたのは1900年である。牧師家族は2年後に帰国するが、クルヴィネンは佐賀で活動を行っていたアメリカ人宣教師たちと合流し、伝道活動を続けた。1903年になるとフィンランドから新たにウーシタロが合流したが、1904年に始まった日露戦争のさいには、フィンランドがロシア側に立ったため、伝道活動に支障をきたしてしまふ。そのため1905年以後、2人はその後加わったミンキネンと共に、アメリカの一派とは別れて、長野県の下諏訪町に移動した。3人は下諏訪で熱心に伝道活動を行い、1913年には最初の総会を開いている³¹⁾。

このフィンランド人宣教師による伝道活動は、日本人のフィンランド人との最初の接触のうちの一つとして捉えることができるだろう。長野という一地方で、英米人ではない3人の西洋人による活動は地元住民の好奇心を刺激したようで、集会は常に満員になったという³²⁾。従って、限られた地域、またルーテル派という限定された範囲であるが、当時存在したフィンランドの初期のイメージの一端は、この宣教活動によってもたらされたと見てよいだろう。

また、この長野県で行われたルーテル派の伝道活動の一つに、フィンランドに留学生を送るというものがあった。これにより、日本からフィンランドに向かう日本人が出るようになった。この最初の一人は渡邊忠雄 (1888 - 1944) と言い、渡邊は下諏訪で洗礼を受けた後、1907年にフィンランドに渡ってい

る。渡邊は在学中に声楽家のフィンランド人女性シーリ・ピッカネン (渡邊シーリ, 1890 - 1950) と結婚し、1911年に彼女を伴って帰国すると、日本でのルーテル派教会で牧師を務めた³³⁾。1920年にラムステットが来日したさいには、フィンランド人を含む他の宣教師たちと歓迎会を企画し、また、住居も斡旋をしている³⁴⁾。渡邊は1922年から24年まで再びフィンランドに滞在し、外務省囑託として在ヘルシンキ日本公使館で勤務した。帰国後もフィンランド公使館で勤務をしたのち、実業界に入っている³⁵⁾。

このような経歴を持つ渡邊は、その最初の留学経験やその後の滞在経験、また、ルーテル派教会での牧師や公使館勤務という経験に基づいて、様々な機会を利用してフィンランドについて発言をしている。

渡邊が公にした文章の最初期のものの一つと考えられるものは、「日本に於ける芬蘭ルーテル教會」と題された雑誌記事である³⁶⁾。巢鴨教会の牧師であった時期であった、1917年に書かれたこの短い記事において、渡邊は国土、人口、美しい風景、民族、ロシアとの関係など、フィンランドという国の概要から書きはじめ、それからフィンランドのキリスト教の歴史、2種の伝道団体について説明をしている。そして、フィンランド人が同じくロシアの高圧な政治に苦しめられている日本に関心を向けた経緯が書かれ、最後に日本での伝道活動の歴史についてまとめられている。本記事の掲載誌はキリスト教の啓蒙誌であるため、本記事に触れることができたのは非常に限られた読者層であると考えられるものの、このようにフィンランドを包括的に紹介していることが見て取れる。

その他に渡邊は、フィンランド公使館勤務時代の肩書だと思われるが、「元通訳官」として1932年に「バルト沿岸諸國の文化風俗」と題された記事を、『世界現状大観』というシリーズの「北欧編」に載せている³⁷⁾。これはタイトル通り、フィンランドとバルト三国の文化や風俗について書いた記事で、フィンランドとエストニアがひとまとまりで解説されている。本記事では、渡邊はフィンランドに関する様々な見出しを挙げ、それぞれ簡潔にその内容を述べてい

る。それらの見出しが指す内容としては、フィンランドの独立の経緯、民族、不屈の国民性（シス）、言語、音楽（カレワラ）、各種祭り、オペラ、教育制度と婦人参政権、エスペラント、男女の義勇軍、プーッコ（小刀）、寒さ対策、スキー、白夜、サウナと食事などがある。これらのうちシス、カレワラ、サウナ、白夜、スキーなどは、現代においてフィンランドを語るさいに頻出する言葉であり、これらのキーワードが、この時代にすでに言及されているのは注目に値する。

なかでも注目すべきは、渡邊はシスを説明している点である。「シス」Sisu は、フィンランド人に備わっているとされる不撓不屈の精神と一般に説明される国民性だが、渡邊は「勇敢なスオマライセン・シス」という見出しで、以下のようにこれを説明している。

フィンランド語に『シス』と云ふ言語がある。邦譯では髓と云ふ字が最も適切だらう。彼等は、日本人が大和魂と呼ぶ様に、屢々『スオマライセン・シス』と云ふ。即ち芬蘭人の髓である。〔原文ママ〕³⁸⁾

渡邊はシスを「髓」と訳し、日本の「大和魂」になぞらえている。また、この引用の後に、このシスによって、フィンランド人がロシアの圧政の中、戦い抜き独立を勝ち取り、また、イマトラという地域に巨大な水力発電所を完成させたと述べる³⁹⁾。渡邊はこの記事を出した後でも、フィンランドとソビエト連邦との戦争について報告するなかで、フィンランドのこの精神に触れたことがある⁴⁰⁾。この1940年の記事では、このシスを「負け嫌ひ、ねばり強さ、何物でも突破して進む戦闘的精神を表現する言葉」⁴¹⁾としている。また、同時期の他の記事でも似たようなテーマを取り上げ、ソビエト連邦との間で起きた戦争、通称「冬戦争」について、両国の戦争の歴史を紐解きながら、フィンランド人の「負けず嫌ひの気性」で戦争を戦い抜くことに期待をかけている⁴²⁾。ここではシスという表現は使っていないが、この「気性」はシスを念頭において使われていると考えられる。

また、渡邊はラジオ講演をもとにした「芬蘭の婦人」（1927年）という記事において、フィンランド

の女性についても語っている⁴³⁾。この記事では、まずフィンランドの気候と自然について語られ、民族と歴史、スポーツなどが説明された後、「此國の婦人界の實状も確に私共の賞賛に値するやうなものがある」⁴⁴⁾と述べられる。そして、その性格や気風の第一の特質として、自尊心の強さを挙げ、国や社会もその自尊心を尊重し、1906年に24歳以上の国民に対して、男女平等の選挙権、被選挙権が導入されたこと、その結果、議員の約2割が女性になったことが述べられる。また、渡邊は、その第二の特色として、「頗る質素で家庭を愛する性格と修養を持つて居る」⁴⁵⁾と述べる。そして、派手な社交生活をせず、家庭を守り、来客を歓待する精神を持つと述べ、続けて、被選挙権がありながら多くは議員になろうとはせず「縁の下の力持ち」⁴⁶⁾に満足すると説明する。また渡邊は、併せてフィンランド人女性の愛国心や社会奉仕の精神があることを述べ、マルタ協会という婦人団体、そして、ロックスワルド団という女性の義勇軍について説明をし、最後に、フィンランド人女性が高い教養を持つことを述べて、この記事を終えている⁴⁷⁾。

このように渡邊は、日本とフィンランド間の交流の黎明期にあつて、フィンランドに関する特徴的な情報を幅広く取り上げ、機会を見つけて伝えてきた。そして、それらのその中には、フィンランドのイメージとして現代でも言及されるものが多くあるのを見て取ることができる。

また、渡邊の報告の仕方には、本題となるテーマの前に、国土や自然、民族、その他の特徴と言った、フィンランドを印象付ける種々の情報が述べられるという特徴が見られる。例えばルーテル教会について説明する前に、「少しフィンランドの事情を申し上げる事にしたい」⁴⁸⁾と述べられ、フィンランドの概要が示される。また同じように、フィンランドの女性について説明する前には、「芬蘭とは一體どんな國であるかと云ふことを申上げて」⁴⁹⁾と述べられ、やはりフィンランドの一般的な情報がまず語られるのである。また、本来の話題のテーマを語る中においても、フィンランドを特徴づける情報を巧みに織り込んでいるやり方も見ることができる。例えば、フィンランドの女性には自尊心があるということが語られる

と、そこから世界でいち早く婦人参政権を取り入れたフィンランドの優れた政治体制へと話が展開するのである⁵⁰。見方を変えるならば、こうした渡邊の語り口は、フィンランドがまだ一般に認知度が低かったという事実が存在していたことを示している。そのため渡邊は、まだ未知のフィンランドを日本に紹介するという使命感のような意識を持っていたのではないかと推測できる。

渡邊は、フィンランドに長期滞在をした最初期の日本人として、また、フィンランド人を妻に持つ、いわばフィンランドの伝道者として、このようにフィンランドの様々な特徴を精力的に紹介し、また、そのさいに巧みに情報を織り込む伝え方をした。このような点から、渡邊は日本におけるフィンランドの認知度を高め、また、そのイメージ形成に大きな影響を与えた初期の一人であると言えるだろう。

(3) 国交樹立直後

① ロシア革命後におけるフィンランドの露出の増加

日露戦争以後、日本でフィンランドが注目を浴びるのは、やはりロシアとの関わりにおいてである。

1917年にロシア革命が起きると、フィンランドは12月に独立宣言を出し、念願の独立を果たす。しかし、その後、資本家側の白衛隊、労働者側の赤衛隊の自警団による衝突が起き、1918年1月には本格的な内戦に発展してしまう。政府はカール・グスタフ・マンネルハイム(Carl Gustaf Mannerheim, 1867-1951)を軍事委員会の代表者とし、白衛隊を政府軍と宣言し、今や反政府軍となった赤衛隊とフィンランド各地で戦った。白衛隊にはスウェーデン人義勇兵、さらにはドイツで軍事訓練を受けた部隊が帰還して加わり、またドイツ軍も参戦して、各地で勝利を収め、マンネルハイムは1918年5月に勝利宣言を出すに至る。その後フィンランド政府は、ドイツ人を君主として迎えるつもりでいたが、1918年11月に第一次世界大戦が終結してドイツが敗北すると、その計画を諦め、最終的には共和制の国家体制を選択する。そして、フィンランドは1919年5月にパリ講和会議にて、連合国によってその独立が正式に承認される。

このようなフィンランドの急激な変化を日本も当然注視することになる。フィンランドの独立宣言から内戦、そして独立の承認に至る過程は、ロシア革命、そして第一次世界大戦中の出来事であり、ロシア、ドイツ、そして連合国の思惑が入り乱れた中で進行した、まさに世界情勢の縮図ともいえ、日本とは無関係ではなかったのである。

渡邊は「露國の革命以来、急にフィンランドに關する電報や記事が新聞などにも多く」⁵¹ になったと述べ、この時期のフィンランドについての報道の多さを証言しているが、この渡邊の証言は、ロシア革命の勃発とフィンランドへの関心は無関係ではないという証左であるとも言えるだろう。そして、渡邊の言葉通り、この時期の新聞記事には、フィンランドについて書かれた記事が見られる。それでは、それらの記事において、フィンランドは実際どのように報告されているのだろうか。その一例として、布施勝治(1886-1953)の記事をここでは挙げてみたい。

布施は大阪毎日新聞に入社後、特派員記者としてロシアに派遣された、レーニン、トロツキーとも会見したロシア通の新聞記者である⁵²。布施は1915年(大正4)以後、主としてペトログラード(旧サンクトペテルブルク)を拠点にして記事を書いているが、1919年にはヘルシングフォールス(ヘルシンキ)発の記事をしばしば発表し、その中で、ロシア革命の報告やロシア情勢に加えて、フィンランド情勢について発信をしている⁵³。

例えば、1919年4月20日に発信された「独立したる芬蘭 独逸人の暗中飛躍」という記事において、布施は独立に浮かれるフィンランド人たちと、フィンランドをロシア左翼過激派に対しての「作戦根拠地」として考えるがため、独立の承認を迷うイギリスとフランス、そして、それを機に再び活動を活発化させる親ドイツ系のフィンランド人たちについて語る。そして、その後このように述べる。

ヘルシングフォールス政界の昨今は表面こそ冷静を装い居れ、その裏面には英仏と独逸、過激派と反過激派、生粋の芬蘭人と瑞典種の芬蘭人と異分子の暗闘沸くが如きものあり。⁵⁴

ここで見られるのは、独立という喜ばしいことに直面しながら、いまだ列強国の思惑に翻弄される小国フィンランドの姿であると言えるだろう。見方を変えるならば、フィンランドはロシア革命、第一次世界大戦が報道される中で、それと関連した話題の一つとして新聞に登場したのである。そして、そのような取り上げられ方がされた場合、布施が報告したような政治的、外交的に難しい舵取りを強いられる国として必然的に描かれることになる。

また、注目すべきは、フィンランドがこうした新聞記事によってしばしば報じられ、世間に露出したことである。これはこれまでの日本の一部の社会層のみに知られていたフィンランドの認知度を高め、初期のフィンランド像の形成に重要な役割を果たしたと言えるだろう。

②ラムステットによる良いイメージの提供

国交樹立後におけるフィンランドには、これまで見たような専ら大国に翻弄される小国というイメージだけではなく、日本人にとって親しみのあるイメージも加わっていく。

その大きな要因の一つとして、1919年に日本とフィンランドが国交を樹立し、その初代公使としてグスタフ・ヨン・ラムステット(Gustaf John Ramstedt, 1873 - 1950)が任命され、1929年まで日本に滞在していたことを挙げることができる。布施は、1919年11月19日付の「芬蘭の親日政策 駐日代理公使任命」という記事において、ラムステットの日本着任について報告し、「教授は大の日本最良にして且其東洋に関する多年の学殖の近く日芬両国の親善に資する所大なるべきは云うまでもなし」⁵⁹と、日本とフィンランドの国際親善に期待を寄せている。

布施が触れているように、ラムステットは来日前となる1898年から1912年の間に、7回もの東方への学術調査を行った経験を持つ、アルタイ語を専門とする言語学者で、1819年当時はヘルシンキ大学教授であった。その経験が買われて、独立直後で本職の外交官が不足していたフィンランドにおいて、ラムステットに白羽の矢が立ったのである。

ラムステットの日本での滞在の様子は、ラムステット自身が残した『フィンランド初代公使滞日見聞録』(1987年)という滞在記にまとめられている⁶⁰。また、ハリー・ハレーンの手による日本滞在の様子を詳しくまとめた記事もある⁵⁷。それらの資料からは、独立したばかりの小国フィンランドが、他の列強国を差し置いて外交上有利に立ち回り、かつ日本に様々な話題を提供し、それがフィンランドの認知度を高め、良い印象を与えただろうことが見て取れる。百瀬宏は、このようなラムステットの代理公使としての活動を「通常の外交業務の他に、今でいえば「フィンランドセンター」が果たしているような学問的交流の活動も〔中略〕行うなど、まさに八面六臂の活躍を繰り広げた」⁵⁸と評している。

そのような活動の成果の一例として、外務省内で「ある種の特別な立場にある」と見られたというラムステットの証言を挙げることができるだろう⁵⁹。ラムステットは日本に向かう船上でイタリア大使伊集院彦吉と出会い、親交を深めたが、それにより伊集院が外務省内において、ラムステットに外交上の助言を与え、時にはラムステットを特別扱いしたことが、このような事情の背景にあるとラムステットは述べている⁶⁰。

また、このような個人的な関係によるものだけでなく、ラムステット自身の努力による外交上の成果も多くあった。1920年にアハベンナマー諸島(オーランド諸島)のフィンランド、スウェーデン間での帰属問題が生じた時、ラムステットはフィンランド代理公使として、フィンランドの主張を日本側に伝えた。ラムステット自身は、その働きかけが国際連盟の判断に有利な判定をもたらしたと見なしている⁶¹。また、ラムステットはアハベンナマー諸島について外務大臣内田康哉と会談するさいに、ヘルシンキに日本公使館を設立することも要請するが、不要と判断されてしまう。しかしその後、首相の原敬が主催する園遊会の席上で、原に直接それを訴え、最終的には政府に公使館設立を認めさせることに成功している⁶²。

フィンランドを上手にアピールしたラムステットの外交上の成果として、尼港事件に対して弔文を

送ったという出来事がある。これは、1920年にシベリアのニコラエフスク(尼港)で起きた、赤軍による住民虐殺事件で、日本人も約700名犠牲になった事件である。ラムステットは日課の新聞購読によって、その事件を伝える記事を発見し、弔意を示す手書きの手紙を内田の個人秘書に送った。それが新聞に伝わり、弔慰を示したのはフィンランド公使だけだったと報道がされた⁶³⁾。その報道によって、ラムステットは日本人から感謝の手紙を受け取ったという⁶⁴⁾。

ラムステットが他の大使を出しぬいて、このような外交上のリードを得ることができたのは、ひとえにラムステットの日本語の運用能力に負っている。言語学者として優れた語学能力を持つラムステットは⁶⁵⁾、日本語を身につけるのも早かった。ラムステットは大学を卒業した後、一度日本語に触れる機会があったが、日本に来る船上で日本語をあらためて学びなおし、来日して暫くするとすぐに日本語は上達し、日本人からは驚かれたという⁶⁶⁾。通常、各国の外交官は通訳を雇っていたが、ラムステットは通訳を雇わず⁶⁷⁾、全て自分で物事を進めた。これによってラムステットは各方面で、日本語ができる日本通として活躍することができたのである。ハレーンは、ラムステットが外交官としてこのような成功を収めたやり方は、土地の言語を修得し、住民の信頼を獲得する文化人類学者や言語学者が行う「フィールド調査」のやり方に近いと指摘している⁶⁸⁾。

ラムステットが言語学者であったということに関連して、日本でのフィンランド認知の向上に、もう一つ大きな役割を果たした要素がある。それはラムステットがエスペランティストであったということである。日本のエスペランティストである何盛三は、ラムステットが著名なエスペランティストであったため、彼の熱心な支援者の一人となった。そして自身のネットワークを通じて、ラムステットを日本中のエスペランティストに紹介した。それはエスペランティストたちの強い関心を呼び、ラムステットは日本各地に講演に呼ばれることになった。そのさいラムステットはエスペラント語で講演をし、それを何盛三らが通訳をした。

その講演会で、ラムステットがよく講演テーマとしたのがフィンランドという国のこと、その民族、自然、文化などであった⁶⁹⁾。また、大きな集まりなどでは、禁酒運動青年とスポーツクラブ、女性の地位、貿易など多種多様なテーマで話したとされ⁷⁰⁾、本題に入る前には日露戦争の話題から切り出すことで、フィンランドを全く知らない聴衆の関心をひきつけるようなこともしたという⁷¹⁾。こうしたラムステットによるこれらの講演、聴衆に話す多様な機会を通じて、日本全国にフィンランドが知られるようになったと言えるだろう。また、ラムステットの回想によると、エスペラント語での講演会において、ラムステットの話した内容が通訳されるさいに、何盛三ら通訳者たちは好んでフィンランドを美化したという。そのため聴衆には、美しい自然、優れた国民、偉大な文化活動等を持つ国としてフィンランドが伝えられることになったとラムステットは述べている⁷²⁾。そうであるならば、この時期に過度に美化されたフィンランドのイメージが日本に伝わった可能性があると言えるだろう。

引き続き外交官以外の仕事に関連して述べると、言語学者であったラムステットはそのアカデミックな活動においても、日本の知識人層に大きな影響を与えたと言える。ラムステットは学者の戸山喜一にフィンランド語を個人教授し⁷³⁾、戸山を通じて、他の学者と知り合いになった。また、歴史学者、東洋学研究者であった白鳥庫吉によって、ラムステットは帝国大学でフィン・ウグル民族の変遷や歴史を講義することになった⁷⁴⁾。また、別の機会に行ったフィンランドの伝承文学と方言について取り上げた講義は、日本の研究者に『カレワラ』の日本語訳を生み出すきっかけとなり、また、柳田国男には日本各地での方言収集の事業に取り掛からせたとラムステットは回想している⁷⁵⁾。ハレーンによると、この講義は新村出、金田一京助、小倉進平などにも影響を与えたという⁷⁶⁾。

こうしたラムステットによる、外交面だけに限らない、特に文化面における精力的な活動は世間に広く知れ渡るようになっていった。特にエスペラント語による地方講演は話題を呼び、ラムステットは各

地で歓迎され、時には到着する場に多くの人間が歓迎のために集まり、パレードが行われたこともあったという⁷⁷⁾。その中でも大阪朝日新聞社の招待によって行われた講演会は規模も大きく、その講演の様子は大阪朝日誌上で報道された。

また、この大阪講演後に報道関係者との知り合いが増え、必然的に新聞記事においてラムステットの活動が取り上げられることが増えていった。そういった記事の中には、ラムステットが娘とスキーに行った記事なども出たが、ハレーンは「これほど頻繁に取り上げられる小国の代表者など、ほかにはいなかった」⁷⁸⁾と評している。また、ラムステット自身は、そうした報道の中身について以下のように書いている。

日本の新聞はしばしば、各国公館の事情に関する記事を、非常に批判的に、ときには歯に衣を着せず書いたが、フィンランド公使館に関しては、いかなる批判的な材料も見出せなかった。⁷⁹⁾

このように、ラムステットは新聞記事の取り上げられ方について述べるなかで、他の公使と比較をして自分の評価が高かったことを暗に述べている。

これまでラムステットが行った活動を見てきたが、最後にラムステットのこのような活動が、日本におけるフィンランドのイメージ形成にどういう意味を持っていたのかを考えたい。

まず言えるのは、ラムステットの存在によって、日本におけるフィンランドの情報が格段に増えたということである。ラムステットが着任した時は、すでにフィンランドの情報は増えつつある時期であった。パーヴォ・ヌルミやハンネス・コレヘマイネンといったフィンランドの陸上選手の活躍や、ヤン・シベリウスの音楽は、この時代に新聞紙上に取り上げられるようになっていた⁸⁰⁾。それらの報道により、フィンランドは独立したばかりの小国としては、比較的话题を提供したと言える。しかし見方を変えれば——ラムステット自身が述べるように——フィンランドの露出は専らそれだけであって、列強国などと比べると当然ながら見劣りをするものであった⁸¹⁾。

周りを見ると、欧米の大企業が日本に代理店を置いて活発に貿易をしている現状があり、それらの国々は経済力や外交力を背景にして、日本の様々な分野に関わっていたのである。しかし先に見たハレーンの評価のように、ラムステットの登場とその旺盛な活動は、日本で提供されるフィンランドの情報を相当増やしたと言えるだろう。

そして次に言えるのは、これらラムステットが提供した話題は、フィンランドに良いイメージを与えることに寄与したということである。先に見たように、各地で行ったエスペラント語による講演は、その通訳者の特徴ある通訳によって、美化されたフィンランド像を日本の聴衆に植え付けたと見ることができる。また、これも先に見たように、ラムステットの言葉に従えば、彼や公使館について書いた記事には、フィンランドを悪く書いたものは無かったのである。ラムステットは専門の外交官ではないため、その資質が本国に疑われるかもしれないという不安を抱いていた⁸²⁾。そのためラムステットが残した記録には、自身が果たした成果が強調される傾向があるのは疑いなく、それゆえ、ラムステットのこの種の発言にはある程度注意を払う必要があるだろう。しかし、本書のそうした有り得べき誇張や強調を差し引いても、新聞による報道などは、概してフィンランドに対して好意的であったというのは間違いではないだろう。ハレーンは、「ラムステットの功労は、日本人のフィンランドに抱く肯定的なイメージを強くしたことだ」⁸³⁾と述べ、後任の駐日大使が、ラムステットの日芬友好に果たした功績をしばしば語ったというエピソードを伝えている。

そしてもう一点、言及しなくてはならないのは、ラムステットが多くの、そして様々な日本人と知り合いになったという事実である。ラムステットはその滞在中に、伊集院彦吉らの重要な政府関係者、東伏見宮家など皇族はもとより、渡邊忠雄のような最初期のフィンランド通、戸山喜一や白鳥庫吉、柳田国男ら多くの学者、知識人や、布施勝治など報道関係者、そして何盛三をはじめとする日本中のエスペランティストたちと知り合っている。こうした人的なネットワークは、ラムステットに代わってフィンランドに

ついて情報を発信する役割を果たしたに違いない⁸⁴⁾。

こうした3つの側面を見てみると、ラムステットの登場によってフィンランドは日本で広く知れ渡るようになり、しかもそれは良いイメージで知られるようになったのである。百瀬が評したように、ラムステットは、まさに一人で「フィンランドセンター」の役割を果たしたのである。

3. おわりに

本論では、日本とフィンランドが最初に接触した時期を、最初期、国交樹立以前と直後の3つに分けて、それぞれの時期に起きた出来事と、それによって生じたフィンランドの「イメージ」を考察した。

最初期の接触においては、大黒屋光大夫とフィンランド人の偶発的な接触と、岩倉遣欧使節団によるロシア報告の中で間接的に語られるフィンランドの報告を見た。また、中村直吉の世界旅行記においてごくわずかに言及されるフィンランドは、ロシアという大国によってかつての宗主国スウェーデンから引き離された悲劇の国として描かれていたのを確認できた。常にロシアに関連付けて語られる小国というイメージは、日本における初期のフィンランドイメージの一つだと言えるだろう。

フィンランドと国交が結ばれる前の時期、1900年初めの日本とフィンランドの接触は、やはりロシアと関係していた。日本の政府関係者である明石がフィンランドの活動家シリアクスと協同して、ロシアに対して諜報、扇動活動を行った事実は、その資料に触れたごく一部の者たちという限定的ではあるが、そうした人たちにフィンランドへ親近感を持たせた可能性があったことを本論では指摘した。また、渡邊のフィンランド留学は、おそらく最初期の日本人のフィンランド長期滞在であり、その経験は、渡邊の手による種々の雑誌記事によって公表されたのを追うことができた。それらの記事においては、今でも知られているシス、サウナなどの用語が出てきており、また、渡邊の記事の書き方には、日本でまだよく知られていないフィンランドを紹介しようとする意図があることを指摘した。

最後に見た国交樹立後、1920年以後の時期にお

いては、ロシア革命以後、次第にフィンランドの情報が新聞記事に見られるようになったことを確認した。そして、国交樹立によって初代駐日公使であるラムステットが来日したが、この特徴的な人物の広範な活動は、日本におけるフィンランドの情報を増やし、かつ良いイメージを広めたことを見ることができた。そこには偶発的な要素もあったものの、ラムステット自身の精力的な活動と、何よりも日本語の運用能力、そして当時流行したエスペラント語の能力がその活動を支え、様々な場面でフィンランドのポジティブなイメージを作り出したことを見ることができた。また、政治家、知識人、報道関係者との多岐にわたる交流も、フィンランドの良いイメージを日本にもたらした可能性があったことも指摘した。

これらのことからわかるのは、初期のイメージと一言で言っても、そこに関わる出来事や人によって、語られる内容は一致するものもあれば、異なるものもある複合的なものであるということである。また、交流の初期においては、まず情報が少ないので、その少ない情報によってイメージは左右される可能性があったということも言えるだろう。本論においてはそれぞれの時代区分における代表的な人物、出来事を取り上げながら、その関連資料を分析したが、フィンランドの情報が増加していった1900年以後、フィンランドの初期のイメージの代表的な要素であったスポーツや音楽という問題については、本論では触れることができなかった。それには、これらの情報は新聞や雑誌などで多く伝達された情報であるので、本論の視野からは外れていたという事情がある。従って、フィンランドの初期のイメージの検討をするためには、新聞記事を中心とするメディアにおいて、フィンランドがどのような取り上げられ方をされていたのかという点も明らかにできれば、フィンランドの初期のイメージに対して、さらに充実した分析が得られるだろう。

⁸⁴⁾ 文部科学省「OECD生徒の学習到達度調査(PISA)《2000年調査国際結果の要約》」『文部科学省』

<http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm> (2018年10月13日参照)。

²⁾ 『かもめ食堂』 <<http://www.nikkatsu.com/movie/official/kamome-movie/>> (2018年10月13日参照)。原作は以下による。群ようこ『かもめ食堂』幻冬舎、2006年。

³⁾ 「10万人達成しました!」『フィンランドのくらしとデザイン——ムーミンが住む森の生活展』 <<https://www.finland-design.com/osirase/%EF%BC%91%EF%BC%90%E4%B8%87%E4%BA%BA%E9%81%94%E6%88%90%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%EF%BC%81/>> (2018年10月13日参照)。

⁴⁾ Arto Lindblom, Taru Lindblom, Miikka J. Lehtonen, *A Study on Japanese's Images and Beliefs on Finland, Sweden and Denmark: Key Results and Conclusions*, S.I., 2016, p. 15. なお同調査はフィンランド、スウェーデン、デンマーク大使館及び芬日商工会議所、フィンランドセンターなどの協力、支援のもと行われた調査である。同資料は以下のフィンランド政府観光局のウェブサイトにはアップロードされている。

[http://87.108.50.97/reliis/REL_LIB.NSF/0/2FE86B1867E48DE2C225802600225BE7/\\$FILE/Nordic%20Images%20in%20Japan%20report%20June%202016%20\(Lindblom%20et%20al.\)T.002.pdf](http://87.108.50.97/reliis/REL_LIB.NSF/0/2FE86B1867E48DE2C225802600225BE7/$FILE/Nordic%20Images%20in%20Japan%20report%20June%202016%20(Lindblom%20et%20al.)T.002.pdf)

⁵⁾ フォロワー数については各大使館の Twitter アカウントにて確認をした。確認日は2018年10月13日である。

⁶⁾ 「シャイ」、「内気」、「無口」といった表現は、フィンランド人の国民性を述べるときに使われる典型的なステレオタイプである。例えば以下を参照せよ。Roman Schatz, *From Finland with Love*, Helsinki, Johnny Kniga Kustannus, 2005, p. 13. Richard D. Lewis, *Finland, Cultural Lone Wolf*, Boston, Nicholas Brealey, 2005, pp. 164-168. あるいは近年では以下のコミックが評判を呼んだ。カロリーナ・コルホネン『マッティは今日も憂鬱』, 柳澤はるか訳, 方丈社, 2017年。

⁷⁾ 2019年には両国の外交関係樹立100周年を祝う

ため特設ウェブサイトが開設されて、様々な行事が企画されている。『日本——フィンランド外交関係樹立100周年』 <<https://www.japanfinland100.jp/>> (2018年10月20日参照)。

⁸⁾ アルテ・コルテライネン「黄金期のジャポニズム絵画」, 日本フィンランド協会編『フィンランド・テール——日本フィンランド修交80年記念論集』日本フィンランド協会, 2000年, 276-292頁。

⁹⁾ 渡邊忠雄「日本に於ける芬蘭ルーテル教會」, 『新人』第18号第10号, 新人社, 1917年, 124頁。

¹⁰⁾ 渡邊忠雄「スオマライネン・シス」, 『政界往来』2月号第11巻, 1940年, 160頁。

¹¹⁾ グスタフ・ヨン・ラムステット『フィンランド初代公使滞日見聞録』, 坂井玲子訳, 日本フィンランド協会, 1987年, 73頁。なお、ラムステットは本書の中で、日本に向かう伊代丸の船上にて、フィンランドに行ったことがあるという日本の青年に話しかけられたと述べている。この青年は弥生丸という商船で台湾からフィンランドへ砂糖を運んだというから、初期にフィンランドに渡った者の中で、商用で訪れたものは一定数いたと考えられる。同書, 19頁。

¹²⁾ 吉武信彦「日本・北欧政治関係の史的展開——日本からみた北欧」『地域政策研究』第3巻第1号, 2000年, 22頁。

¹³⁾ 「四 海外留学生と雇外国人教師」『文部科学省』 <http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/otthers/detail/1317601.htm> (2018年10月27日参照)。

¹⁴⁾ 外川継男「岩倉使節団とロシア」, 田中彰, 高田誠二編『『米欧回覧実記』の学際的研究』北海道大学図書刊行会, 1993年, 131頁。西村庚「明治初期の遣露留学生列伝」『ソ連研究』第8巻第11号, 1959年, 32, 40-42頁。

¹⁵⁾ 本論で示した『米欧回覧実記』におけるフィンランドに関する記述は、以下の資料の以下の頁に記載されている内容を筆者がまとめたものである。久米邦武編『特命全権大使 米欧回覧実記(四)』岩波書店, 1980年(岩波文庫青141-4), 23-26, 28, 31, 35, 38, 42, 52-53, 74, 87, 98, 156-157, 171頁。

¹⁶⁾ 大森修「明治期における豊橋人の海外体験」『東

三地方史研究会』創刊号, 1981年, 1-5頁。なお, 無銭とは謳っているが, 出発前に豊橋の有力者10人より10円ずつ, 計100円の支援を受けている。同書, 3頁。

¹⁷⁾ 中村直吉, 押川春浪編『歐洲無銭旅行』博文館, 1912年(五大洲探検記第5巻)。

¹⁸⁾ 『歐洲無銭旅行』以外で, 中村の世界旅行の様子がわかる資料として, 中村自身による新聞への寄稿, 新聞での露出, 友人の証言などがあるが, それは以下の資料に詳しい。楠元町子「明治の新聞を活用した歴史の授業——明治時代にグローバルに活躍した郷土の偉人中村直吉——」, 愛知淑徳大学教育学会『学び舎教職課程研究』第8号, 2013年, 11-23頁。

¹⁹⁾ 中村, 前掲書, 178-191頁。

²⁰⁾ 同上書, 184, 189頁。

²¹⁾ 同上書, 187頁。

²²⁾ 中村の伝記的事項について詳しくまとめた大森修によると, 本書はSF的冒険小説を発表していた押川春浪との共著であり, 内容についてはかなり「粗暴」なところがあるという。大森修, 前掲書, 3頁。

²³⁾ 中村, 前掲書, 187-189頁。

²⁴⁾ なお, ロシア統治時代のフィンランドがロシアの圧政に苦しんでいたという見方について, 石野裕子は, ロシアがフィンランドの自治を制限したのは, その統治時期の後半となる1890年代からで, それまでは「広範囲の自治を長く享受していた」と指摘している。石野裕子『物語 フィンランドの歴史』中央公論社, 2017年(中公新書2456), 55頁。

²⁵⁾ Konni Zilliacus: Japanesiska Studier och Skizzer. Wentzel Hagelstams, 1896.

²⁶⁾ ハリー・ハレーン「G・J・ラムステット」, 『フィンランド・テーブル』, 前掲書, 304-305頁。

²⁷⁾ 稲葉千晴『明石工作——謀略の日露戦争』丸善, 1995年(丸善ライブラリー158), 1-2頁。1925年の陸軍大学の講義用テキストでは, 明石が日露戦争の勝利の一因と記録され, 明石工作が高く評価されているのが見られるという。同書, 2頁。

²⁸⁾ 同上書, 5-6頁。なお, 明石によって陸軍に提出された『落花流水』は第二次世界大戦後に焼却されてしまったが, 写しが印刷されて出回り, 戦後には出版

もされている。また, 明石家から寄託された原稿2編が, 国立国会図書館憲政資料室「明石元二郎関係文書」に所蔵されている。この原稿のうち『落花流水』のおおもとになった原稿は『大秘書』という題目が付けられているが, これも近年印刷され, 出版されている。明石元二郎著, 尚友倶楽部史料調査室, 広瀬順皓, 日向玲理, 長谷川貴志編『寺内正毅宛明石元二郎書翰: 付『落花流水』原稿『大秘書』』芙蓉書房出版, 2014(尚友ブックレット27)。また, 『落花流水』については前坂俊之による「現代訳」が公開されている。前坂俊之『明石元二郎大佐』新人物往来社, 2011年。

²⁹⁾ 稲葉, 前掲書, 6頁。

³⁰⁾ オラヴィ・K・フェルト著, 百瀬宏訳「日露戦争時における日本諜報活動とフィンランド・アクティビスティの協力」, 歴史学会編『史潮』第7号, 弘文堂, 1980年, 84頁。また, 日露戦争における日本の諜報活動については, 上記に挙げた稲葉, フェルト以外にも以下のイアン・ニッシュの文献も参照した。Ian Nish, "Japanese Intelligence and the Approach of the Russo-Japanese War", in Christopher Andrew and David Dilks (ed.), *The Missing Dimension: Governments and Intelligence Communities in the Twentieth Century*, London, Macmillan, 1984, pp. 17-32.

³¹⁾ ソベリ・ビルビ「フィンランド・ルーテル福音教会」, 『フィンランド・テーブル』, 前掲書, 294-296頁。高木アンナ・カイサ「「神様の愛を日本に」——フィンランドのルーテル教会の日本伝道の歴史」『フィンランドを知るための44章』明石書店, 2008年, 306-310頁。福山猛編『日本福音ルーテル教会史』日本福音ルーテル教会, 1954年, 57, 69, 165-166頁。また, フィンランド宣教師と諏訪ルーテル教会の歴史については, 以下も参照せよ。「フィンランド・ミッション日本伝道の開始」『日本福音ルーテル諏訪教会』
<<http://park19.wakwak.com/~suwa/history.html>> (2018年10月21日参照)。

³²⁾ 渡邊「日本に於ける芬蘭ルーテル教会」, 前掲書, 125頁。

- ³³⁾ 日本キリスト教歴史大事典編纂委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 1988年, 1545頁。法元豊子「渡邊シーリ」, 折井美那子, 女性の歴史研究会編『新婦人協会の人びと』ドメス出版, 2009年, 194-196頁。
- ³⁴⁾ ラムステット, 前掲書, 48-50頁。また1923年以後は, 渡邊はラムステットの「アシスタント兼通訳」になったという。ハレーン, 前掲書, 313頁。
- ³⁵⁾ 日本キリスト教歴史大事典編纂委員会, 前掲書, 1545頁。
- ³⁶⁾ 渡邊「日本に於ける芬蘭ルーテル教會」, 前掲書, 1917年, 122-126頁。
- ³⁷⁾ 渡邊忠雄「バルト沿岸諸國の文化風俗」『世界現狀大観』第6巻, 新潮社, 1932年, 435-450頁。
- ³⁸⁾ 同上書, 436頁。
- ³⁹⁾ 同上書, 437-438頁。
- ⁴⁰⁾ 渡邊忠雄「スオマライネン・シス」, 前掲書, 160-161頁。
- ⁴¹⁾ 同上書, 161頁。
- ⁴²⁾ 渡邊忠雄「ソ・芬戦闘の将来 フィンランドの内情」, 『時局情報』第4巻第1号, 毎日新聞社, 1940年, 172-179頁。
- ⁴³⁾ 渡邊忠雄「芬蘭の婦人」, 日本放送協会関東支部編『婦人講座:ラヂオ講演 第1巻』日本ラヂオ協会, 1927年, 160-171頁。
- ⁴⁴⁾ 同上書, 164頁。
- ⁴⁵⁾ 同上書, 166頁。
- ⁴⁶⁾ 同上書, 168頁。
- ⁴⁷⁾ 同上書, 169-170頁。なお, 渡邊の妻である渡邊シーリは来日後, 市川房枝に誘われて新婦人協会に参加し, フィンランドの男女平等の社会について報告している。法元豊子, 前掲書, 194-196頁。
- ⁴⁸⁾ 渡邊「日本に於ける芬蘭ルーテル教會」, 前掲書, 122頁。
- ⁴⁹⁾ 渡邊「芬蘭の婦人」, 前掲書, 160頁。
- ⁵⁰⁾ 同上書, 164頁。
- ⁵¹⁾ 渡邊「日本に於ける芬蘭ルーテル教會」, 前掲書, 122頁。
- ⁵²⁾ 日外アソシエーツ編『20世紀日本人名事典』, 日外アソシエーツ, 2004年, 2207頁。なお, 本資料では布施が入社した会社を東京日日新聞, 入社年を1916年(大正5)としているが, 記事の公表先が大阪日日新聞であるので, 入社先は大阪日日新聞であり, 記事の公表年が1915年以降なので, 入社年は1915年ではないかと思われる。本論ではいずれも後者で記している。
- ⁵³⁾ 布施勝治のヘルシンキ発の記事としては, 例えば, 以下のものがある。「第二国民の養成に成功せる過激派(上・下)」『大阪毎日新聞』1919年7月27日, 28日(神戸大学経済経営研究所「新聞記事文庫」所収, 大阪毎日新聞, 教育(20-027)), 「過激派の神と称えられつつある最近のレーニン(上・下)」『大阪毎日新聞』1919年7月31日, 8月6日(同文庫, 思想問題(1-110))。
- ⁵⁴⁾ 布施勝治「独立したる芬蘭 独逸人の暗中飛躍」『大阪毎日新聞』1919年6月16日(「新聞記事文庫」, 前掲資料, 外交(8-067))
- ⁵⁵⁾ 布施勝治「芬蘭の親日政策 駐日代理公使任命」『大阪毎日新聞』1919年11月19日(「新聞記事文庫」, 前掲資料, 外交(33-114))。なお, 布施はラムステットを「余の今春來の知己」として, 日本に赴任する前に布施に相談に来たと述べているが, ラムステットの記録では, 布施は渡航前に訪問してきた一日本人記者として扱われており, 異同が見られる。ラムステット, 前掲書, 14頁。
- ⁵⁶⁾ ラムステット, 前掲書。
- ⁵⁷⁾ ハレーン, 前掲書。
- ⁵⁸⁾ 百瀬宏「ラムステット代理公使異聞——補遺として」『フィンランドを知るための44章』, 前掲書, 348頁。
- ⁵⁹⁾ ラムステット, 前掲書, 97頁。
- ⁶⁰⁾ 同上書, 18, 22, 96-97頁。
- ⁶¹⁾ 同上書, 70-76頁。ただしハレーンが紹介している百瀬宏の発言によると, このラムステットの回想を裏付ける資料は外務省の保管書類の中には存在しないとのことである。ハレーン, 前掲書, 309頁。
- ⁶²⁾ ラムステット, 同上書, 72-83頁。
- ⁶³⁾ 同上書, 97-98頁。
- ⁶⁴⁾ ハレーン, 前掲書, 305頁。
- ⁶⁵⁾ 複数の言語を話せるラムステットは, 他国の公使

館主催の舞踏会などにしばしば招待客の話し相手の「助っ人」として招待されたことがあったという。ラムステット, 前掲書, 57-58 頁。

⁶⁶⁾ 例えば以下の頁を参照せよ。同上書, 87 頁。

⁶⁷⁾ ハレーン, 前掲書, 310-311 頁。

⁶⁸⁾ 同上書, 325 頁。

⁶⁹⁾ ハレーン, 同上書, 319-320 頁。講演の様子は以下を参照。ラムステット, 前掲書, 112-118 頁。

⁷⁰⁾ ハレーン, 同上書, 319 頁。

⁷¹⁾ 百瀬, 前掲書, 349-350 頁。

⁷²⁾ ラムステット, 前掲書, 112 頁。また, そのようなラムステットの講演会の聴講者の一人に, 宮沢賢治がいる。宮沢は講演後にラムステットに話しかけ, 自作品を贈っている。ハレーン, 前掲書, 317-318 頁。

⁷³⁾ ラムステット, 同上書, 70-71 頁。また, この縁を通じて, アハベナンマー問題が生じたときは, 戸山に協力を得ている。1920 年にジュネーブで開催される国際連合の会議に, 戸山の伯父である目賀田種太郎は日本代表団を率いることになったが, 戸山はこの伯父の秘書として代表団に同行することになった。ラムステットはこれを知ると, 戸山を通じて自身の覚書を代表団に配布させた。同上書, 75 頁。

⁷⁴⁾ ラムステット, 同上書, 84 頁。また, ハレーン, 前掲書, 306 頁。

⁷⁵⁾ ラムステット, 同上書, 128-127 頁。なお, 柳田もジュネーブの代表団の一員であった。

⁷⁶⁾ ハレーン, 前掲書, 310 頁。

⁷⁷⁾ ラムステット, 前掲書, 129-131 頁。

⁷⁸⁾ ハレーン, 前掲書, 311 頁。

⁷⁹⁾ ラムステット, 前掲書, 122 頁。

⁸⁰⁾ 同上書, 125-126 頁。

⁸¹⁾ 同上書, 同頁。

⁸²⁾ 例えば以下を参照せよ。同上書, 72 頁。

⁸³⁾ ハレーン, 前掲書, 325 頁。

⁸⁴⁾ 例えば, ラムステットの在任中に知り合った市河彦太郎は, 後にフィンランド大使になり, 妻市河かよ子と共にフィンランドの滞在記を出している。これは滞在する中で経験したフィンランドの社会や生活の様子を書いた記録のまとまったものの最初期の一つであると言えるだろう。市河彦太郎, 市河かよ子

『フィンランド雑記』黄河書院, 1940 年。市河かよ子には単著もある。市河かよ子『白樺を焚く』岡倉書房, 1941 年。また, ラムステットについて書いた以下の文献も併せて参照せよ。市河かよ子「ラムステッド博士のこと——フィンランドの思い出」, 『フィンランド・テーブル』, 前掲書, 329-352 頁。

本論は駿河台大学の「平成 30 年度 駿河台大学地域創生研究センター指定型研究プロジェクト」の研究費をもとに, 2017 年 8 月 26 日から 9 月 3 日まで行われたフィンランド視察を契機に書かれたものである。